

つねに足元を見ながら、チャレンジしていきたい

学習院大学 学長

福井 憲彦



ふくい・のりひこ氏

1946年 東京生まれ。
1977年 東京大学大学院人文科学研究科(西洋史学)中退。
1977年 東京大学文学部助手, 1983年東京経済大学助教授等を経て, 1988年より学習院大学文学部史学科に専任教員として着任, 史学科主任, 全学教務部長, 文学部長, 学校法人常務理事などを経て, 2007年11月より大学長に就任。
ほかに財団法人史学会評議員, 財団法人日仏会館理事, 日仏歴史学会理事, 文部科学省中央教育審議会専門部会委員, 日本学術振興会関連の委員などを歴任。2007年12月よりユネスコ国内委員会委員

130年におよぶ長い歴史をもつ学習院は、戦後に私立学校として再発足してから昨年で60周年を迎えました。この長い伝統を受け継ぎ一層の飛躍を目指すためにも、そして現在の競争的環境を乗り越えていくためにも、さらにはグローバル化、ユニバーサル化という現代の潮流に対応していくためにも、自らの大学をどのように位置づけるかが経営上の基本的前提であると認識しています。本学は4学部を擁し、学生総数8000人程度のいわば中規模の大学といえます。戦略としてひとつの選択肢は、総合大学として規模を拡大していくという方向です。学部を増やし、学生数をどんどん増やし、経営基盤を固める。あるいは、他大学との連携を模索する。しかし単純な拡大の方向は、本学にはふさわしくないと考えています。

たとえば理学部を保持していくのは、コスト的には楽ではありません。学生をたくさん採り、それを少数の教員で見れば、経営的な苦労は減るでしょう。しかしそれでは、本学の良さを失くしてしまいかねません。学生に対してほぼマンツーマンに近い形で教員が指導するという教育環境が、理学部の誇るべき長所と私は考えています。それを学生も、社会も非常に高く評価してくださっています。

本学は15年ほど前に生命分子科学研究所を設立しました。そして今、ようやく機が熟したと見て、今春より大学院にて生命科学専攻をスタートさせます。さらに来春には理学部の中に生命科学科を立ち上げる予定です。この改組に当たって新たな教員を募集しました。すると、その道のトップクラスのたいへん優秀な先生方が集まってきたのです。誠にありがたいことで、これなどは、本学の研究レベルや教育環境、指導体制に対する高い評価の証ではないかと思っています。

また、戦後に宮内省を離れ、私立学校として生まれ変わって60年を経過した今も、本学には皇室の方々が

入学されてまいります。警護が入ることはありますが、特別扱いをするわけではありませんし、特別のコースを設けているわけでもありません。一般の学生とまったく同じように学ぶ環境があるだけですが、それでもそうした関係が長く続くということは、本学が教育の質を長年確保してきたことを評価していただいているということではないでしょうか。外部評価の最たるものと、私は受け止めております。

従いまして本学としては、しゃにむに学生を集めていくということではなく、自らの長所を踏まえ、これまでに培った基盤を活かし、その可能性を最大限追求するというかたちで着実に改革を進めていくことが、目指すべき道ではないかと私は考えております。

開き、発信することでサポートを得たい

伝統を受け継いでいくとはいえ、変えるべきところは変えていかなければ伝統も生きてきません。

本学のひとつの課題は発信力です。本学にはたいへん優れた社会活動をしている先生や学生がたくさんおります。教授陣の知名度をトータルすると、日本の大学の10傑に入ると言っていただくこともあります。学生たちの活動も、国際交流や豊島区内でのボランティア活動などを始めとして、たいへん活発に行っています。そうした個々の活動は盛んなのですが、それが大学の方針として、ひとつのものとしてコーディネートされ、「学習院大学」というブランドとして展開できているかといえば、必ずしもそうではありません。経営的には、それは効果的とはいえませんから、やはり大学としても、これからは発信すべきところはきちんと発信していくべきだと思っています。

組織全体としても内側に閉じこもるのではなく、つねに外に「開く」ことを志向していこうとしています。たとえば卒業生に対しても、これまではあまりこちら側から働きかけることはありませんでした。しかしこれからは、そうしたスタンスではいけません。新しい

事業を興していくにあたって財政基盤を固める必要もありますから、大学から積極的に情報を提供して、卒業生のご意見を聞きながらご支援いただくというかたちを模索していかなければなりません。

学生に対しても同様です。授業評価には数年前から取り組んでいますが、それだけでなく、いろいろなかたちで働きかけ、意見を募り、活動に巻き込んでいこうと思っています。たとえば本学は、山手線の内側に6万坪もの敷地を持ち、その半分近くを緑が占めることを誇りとしています。ここを私は「エコキャンパス」にしようと言っています。この緑を維持するためにどのような対策をすべきか、運動をしていくべきかを学生たちに考えてもらい、活動をリードしてもらおう。そうした活動も大学を活性化していくでしょう。

組織の一員という意識は必須

個々の教職員の意識も、もっともっと「開く」ことを私は要望しています。本学には教育熱心な先生が多いのですが、古い先生であればあるほど、「わからないのは学生がわるい」といったスタンスになってしまいがちです。しかし学生が年々変化していることを考えれば、そうした姿勢は見直していかなければなりません。職員に対しても、これからは大学を支えるという意識ではなく、活発に政策提言してもらわなければ困ると伝えています。教職員が一体となり、各々が組織の一員であるという意識を持たなければ、これからの大学は立ち行かないのではないのでしょうか。教育力にさらに磨きをかけるためにも、教職員が元気でまとまって動くことが必要です。

日頃、私がエレベーターに乗ると、乗り合わせた学生たちはきちんと会釈をして出ていきます。本学には、まだまだそうした古き良き伝統が息づいています。そうした素晴らしいものは残しつつ、新たなチャレンジをしたい。それが私の希望であり、使命といえます。